
教職課程登録学生による学びの省察

—教育実習を中心に—

岩田 一正

はじめに

本学の教職課程では、登録学生の全員が教職に就くことを希望しているわけではなく、教師を志す学生が数多く存在する一方で、教員免許状取得のみを目指す学生、あるいは取り敢えず教職課程に登録する学生、あるいは教育に関する教養の獲得を目指す学生も存在しているのが実情である。

学生たちが教職課程を通じて何を目指しているのかは多様であるため、彼ら／彼女らが教職課程に登録する際には、それぞれが何を指すとしても、すべての者にとって大きな経験となり得る教育実習を、自分にとって充実したものとするを教職課程の大きな目標として設定するように伝えている。そしてその目標に向かって、さまざまな科目、介護等体験、ボランティアなどを通じて、教育やそれぞれの専門教科・科目に関連する教養、見識を深めてもらいたいと話している。

教育実習を重視しているのは、それぞれの専門教科・科目を超えて全員が参加する実習だからということもあるが、それ以上に、教育実習において学生たちが、指導教諭や数多くの子どもたちとのかかわりを通じて、自分自身の教育観や子ども観、教師観を省察することとなるゆえに、教職課程を通じて学んできたことを、各学生が教育実践に即して意味づけ直すこととなるからである。

それでは、教育実習で学んだことを一つの契機として、教職課程で学んだことを、学生たちはどのように文脈化して筋立て、自身の経験として再構成しているのであろうか。言い換えれば、学生たちは、教職課程を通じてどのような学びの履歴を形成しているのであろうか。このことを認識し理解するために、今回、教職課程の活動報告として、2019年度の教職課程に登録している学部4年生のなかから5人の学生に、教育実習を中心とする教職課程を通じた学びを省察してもらい、自分自身の学びの履歴を記述してもらうこととした。

ところで、教職課程に登録している学生たちの学びの履歴を認識し理解することこそ、教職課程を充実するための要諦であると言える。しかしながら、私自身を含めて教職課程に関係する科目を担当する教員は(想像以上に科目は多く、自身が担当する科目が教職課程に関係していると承知していない教員も存在することだろう)、何人が／誰が教職に就くこととなるのか、何人の学生が教員免許状を取得したのかといったことに関心を向ける一方で、学生たちがどのような学びの履歴を形成しているのかを了解していないのが実態であろう。

以下で見ていく5人の記述は、我々がほとんど知ることのない、学生たちが教職課程を通じて形成している学びの履歴の一端を開示してくれるものとなっている。5人の学びの履歴を、自分自身の授業や学生とのかかわりを省察する足場としていただければ幸いである。

学生たちの学びの履歴

以下では、前述したように、4年生5人が自分自身の教職課程を通じた学びの履歴を教育実習を中心に記した文章を、文芸学部国文学科、同英文学科、経済学部経済学科、文芸学部文化史学科、法学部法律学科の学生の順で掲載していくこととしたい。読みやすさを考慮して改行している箇所、また個人情報にかかわる学校名などを削除した箇所など存在するが、基本的には学生が記した文章をそのまま載せている。

1 教師を志して

文芸学部国文学科 三宅夏純

私は幼少期から教員になることを目標に勉学に励んできた。きっかけは小学生のころ、勉強が出来るほうだったので人に教えることが多くあった。その中で、将来先生という職業もよいかもしれないと思うようになり、そして高校生の頃に出会った先生に憧れて本格的に教師を志すようになった。大学もしっかりとした教職課程がある学部を選び、本学に進学した。最終的には、教職の先生方、また同じ志を持つ仲間たちのおかげで教員採用試験に合格することができた。それを踏まえて、これからこの教職課程で学んだこと、また教育実習での経験を書いていきたい。

最初に、教育実習前のことについて述べよう。私は教師になるために教職課程に登録していたので、この教育実習に対しても将来に直結する経験だと思い、事前に多くの準備をした。まずは授業の準備である。事前の打ち合わせは、教育実習の約1か月前にあったのだが、その際にどこを指導するのかを、学校側が教えてくださったので、打ち合わせ後すぐに授業準備を始めた。この早期からの準備が、私の教育実習をより有意義なものとした、と今となっては感じている。

実習中には余裕をもって多くのことを学んでいきたいと思い、自分がやる範囲は実習前にすべて準備を終わらせた。そのおかげで実習中は先生との相談を繰り返しながら、よりよい指導案が出来上がっていった。

次に、授業以外の部分の準備である。私は教育実習生として生徒と接するため、先生方よりも生徒に近い存在として積極的にコミュニケーションを取ろうと考えた。まずは、教育実習用のノートを用意し、自分の目標、どのようなことに気を付けるかなどを記した。実際、そのノートは、話した生徒の特徴や好きなものを書くなど話すきっかけをつかめるものとなったので、有効に活用できた。実習前は本当にやっていけるかと不安であったが、念には念を入れて準備したおかげで、非常に有意義な教育実習になった。

そして教育実習中は、3週間という一見長く感じる期間も嵐のように過ぎ去り、最終日はさみしく感じてしまうほど、周りの先生方、生徒に恵まれ素晴らしい経験を得ることができた。

前述したように、事前に授業準備はほぼやっていたので実習中は多くの先生方の授業を見学することができた。同じ教科の授業はもちろん、他教科の授業からも、生徒の扱い方や、授業の進め方など、多くのことを学んだ。さらには、教員採用試験についても直々に校長先生からお話を伺うことができ、非常に助かるこ

とばかりで感謝してもきれない。

また、生徒もいい子たちばかりで、最初は不安だったが、クラスマッチで一緒に応援したり、文化祭の準備と一緒に取り組んだりしていく中で、かなり仲良くなることができた。私は、積極的にコミュニケーションをとるために昼休みは担当クラスで一緒にお弁当を食べ、交流を図った。そのおかげか、序盤から打ち解けることができ名前も比較的早く覚えることができた。名前を覚えておく授業の際にも、授業が円滑に進められ学習指導にも大いに役に立った。

私は現代文・古典を指導したのだが、目標として、少しでも国語を好きになってもらうということが、一人の生徒にでも達成できればいいなと思って指導を行った。一つひとつの授業で熱量をもって、自分が教えられることを一生懸命指導したら、最後の授業のアンケートで、「先生の授業のおかげで国語を好きになることができました。」と書いてくれた生徒がいた。その言葉が教育実習の経験の中で一番印象に残っている。私は教育実習生であるのに、そのように生徒によい影響を与えられたことがうれしくて、さらに教師になりたいという気持ちが強まった。

そのアンケートには学習のことだけでなく、進路のことや、生活のことなども相談として書いてくれる子もいて、私が答えられることを精一杯答えた。そんな風に私のことを頼ってくれたことがうれしく、やりがいというものはこの時にも感じるのだと思った。また、担当クラスも非常に良いクラスで、私は、教育実習最終日の次の日に文化祭へ遊びに行く約束をしていたが、行ってみると、アトラクションの最後にプレゼントと色紙をいただくというサプライズがあって泣いてしまった。そのくらいあったかいクラスで、このクラスで教育実習ができてよかったと心から感じた。

このように、教育実習を通じて私は教師になりたいとさらに思うことができ、教育実習生という立場だったが、教師のやりがい、というものが少しわかってよかった。

次に、教職課程を通じて学んだことを中心に書いていきたいと思う。私は前述したが、教師になるために教職課程を履修して、この4年間で学習指導、生徒指導（生活指導）など多くのことを学んだ。特に3年生から履修した国語の指導に関しての授業は、教育実習で大いに役に立ち、一番ためになった授業だと感じている。

それは、教育実習でもそうだが、教員採用試験の二次試験でも大いに助けられた。単元指導計画を書いて提出しなければならない試験であったのだが、先生には添削もしていただいて、普段から学んでいたことをここで生かすことができた。国語科教育法では、模擬授業を中心に行い、多くのことを指導されたおかげで、授業の組み立て方を一から学ぶことができた。

さらに、ICTを活用して授業を行うという、今のニーズに合った指導法を教授していただき、今後にも生かせる技術を得ることができた。しかも、4年生になったら、3年生との合同授業も行った。その中で、3年生の模擬授業を指導するという立場で、自分が模擬授業をするのではなく、指導という立場で客観的に授業を見ることができて、一層の学びとなってよい経験ができた。

このように、教職課程を通じて私が教師となるために足りない部分を補うことができたし、自分自身も授業から多くのことを学び成長できたと思った。

最後に、私は教員になるために今年度教員採用試験を受験して、無事合格することができた。そのために、受験勉強を必死に頑張った。本格的に私が教員採用試験の勉強を始めたのは2月ごろである。その時期に教員採用試験のための塾に入り、勉強を始めた。

最初のころは覚えることが多すぎて大変だったが、自分の夢のために合格を目指し必死に勉強して、徐々

にわかるようになってきた。一次試験は教職教養・専門教養（国語）・論作文とあり、教職教養では、特に過去問を多くやった。私は東京都の教員採用試験を受験したので、東京都の過去問はもちろんのこと、47都道府県すべての過去問を行った。過去問を行うことでどのような問題が出てくるのか分析ができたし、東京都の難易度も知る事ができた。

次に専門教養、国語の試験ではマークシート式の問題だったので、私は過去問や、センター試験の過去問を解いて自分の勉強を進めた。ただ、学習指導要領の部分だけは、学習指導要領を読み進めながらポイントに着目して覚えた。論作文は過去問の内容からたくさん書いて、先生にも添削をしていただいて、よりよいものにしていった。試験では、大まかな内容を決めておいて、バリエーションを豊富にして挑んだら、本番でもよく書けたと感じた。

二次試験は集団討論・個人面接であったが、内容をノートにまとめたり、友達と一緒に面接の練習をしたりして合格するためにやれることをやった。本番ではかなり緊張したが、練習の成果を出すことができ合格することができた。

今後、私は教員として子どもたちの未来のために働いていくのだが、本学で学んだこと、さらに教育実習で学んだことを活かして自分らしく精進していこうと思う。

2 なりたい自分になれる

文芸学部英文学科 加藤恵仁

私が高校生の時に出会った先生の人柄に憧れて、先生になりたいと思ったように、今度は私自身が生徒の人生に影響を与えたいと思ったのが、私が教師を志したきっかけである。そのため、本学に入ってから教職課程を履修し、教育実習も行った。教職課程だけでなく、教員採用試験に向けての勉強も行った。その結果、幸いにも今年度の東京都の教員採用試験に合格することができた。以下では、教育実習や教職課程を通して経験したことや学んだことを述べていきたい。

教育実習に関しては、私は母校の都立高校で計16日間行った。担当したホームルーム・クラスは2年D組であり、授業は2年のC組とD組の2クラスを持ち、コミュニケーション英語Ⅱを担当した。それぞれ8コマずつ任せていただいたので、計16コマの教壇実習を行うことができた。私が教育実習を通して学んだことは二つある。一つ目は授業の大切さ、二つ目は生徒のありがたみである。

一つ目の授業の大切さとは、入念な教材研究や事前準備の必要性のことである。実習生として初めて教壇に立つ人であろうが、講師経験がある人であろうが、生徒からすれば誰もが先生である。初めて教壇に上がるからといって、大した授業をしなくていいわけではない。自身ができる精一杯の努力を尽くした授業を行わなければいけないのだ。

どれだけ教材研究を行ったか、どれだけ教科書の内容について調べたかで授業の質は大きく変わる。授業の質が高まることで生徒の反応や食いつき具合が変わり、生徒の興味・関心・意欲が高まり、理解度も増していく。その反対に少しでも手を抜いた授業や準備不足の授業を行えば、生徒は瞬時に見極めて、まじめに聞かないどころか先生のことを信用しなくなってしまう。授業一つで生徒との距離が大きく変わるのだ。

教職に関するある講演会で教育委員会の方が、“授業のやり取りで生徒との人間関係を築き、授業を通して生徒指導をする”という、とても心に残るお話をしてくださった。学校には必ず生徒指導を行う先生がいるが、月曜日から金曜日の中で生徒指導という授業は1回もない。だから各教科の授業が大切なのだ。そのための準備は決して怠ってはならず、限られた時間の中でも生徒のためを思って考えることが求められる。

二つ目の生徒のありがたみとは、生徒の存在の大きさである。私はたった3週間の実習であったが、このことをもの凄く痛感した。実習はもの凄く辛くて、苦しくて、毎日逃げ出したかったが、生徒たちとの交流が楽しくて頑張ることができた。

最初は私自身も緊張をして、生徒たちへ話しかけることにためらいがあったが、勇気の一步を踏み出して休み時間や放課後に声をかけていくと、次第に生徒の方から私に声をかけてくれるようになった。部活動の見学も毎日欠かさず行い、ほぼすべての部活動を回って学年を問わず仲良くなることができた。

私の授業が上手くいかなかった時や指導教諭からかなりきついことを言われてへこんでいた時も、生徒と少し話すだけで気持ちがとても楽になり、生徒からもらうパワーは計り知れないと感じた。

教師は生徒に授業や授業外で様々なことを教え与えているが、その一方でそれ以上のものを生徒から与えられていると思った。実習先の副校長先生が実習の最終日に、“教員生活で楽しいことは2割、苦しいことは8割。けれども、その2割が8割に勝るからやりがいがある”というお話をしてくださった。この言葉に私は深く共感した。たとえ私が苦しい状況にいても、生徒の存在によってまた頑張ろうと思う活力に変わったのだ。

次に教職課程や教員採用試験に向けて学んだ経験を述べていく。教職課程や教員採用試験に向けての勉強を通して私が大切であると思ったことは三つある。一つ目は人との繋がり、二つ目は自身の教師像をつくること、三つ目は目的を見失わないことである。

一つ目の人との繋がりとは、様々な講座やOB・OGが集まる会に出席することである。講座に出ることによって様々な知識を得ることができると同時に、同じ教員志望の人たちと出会うことができ、一緒に頑張れる仲間が見つかる。また、OB・OGが集まる会に出席することで、教員間のコネクションを築けたり、現管理職の方と出会えたりする。

実際に私は数多くの講座に参加して、たくさんの仲間と出会うことができた。教員採用試験を乗り越えていくためには多くの仲間が必要であると私は感じた。なぜなら、多くの情報を交換できたり、同じ境遇にいるからこそ何でも相談できたり、お互いを高め合うことができるからである。

また私は、本学で行われた現役教員のOB・OGが集まる会にも参加した。そこで私は現役の都立高校の校長先生にお目にかかることができ、コネクションを築くことができた。私自身東京都の教員を一番に志望していたため、面接票や単元指導計画などを見ていただき、数多くのサポートをしていただいた。教員採用試験に向けて勉強をしていると、こうした講座やOB・OGの集まる会に出席する時間が惜しく感じられるが、自身にとって価値ある人と繋がることのできることで大切であると実感した。

二つ目の自身の教師像をつくることとは、自身の教員としてのビジョンを持つことである。やはり教員になるにあたって自らの教師像を持つことは大切である。教育とはどうあるべきか、教師とはどうあるべきかなどを考えることである。これはすぐに考えつくものではないと思う。教職課程や教員採用試験に向けての勉学に励むうちに、自身で見つけていくものだと思う。

私も教職の勉強や数多くの教育にまつわるニュースや新聞を見ていったうえで、教師とは本来こうあるべきだとか、私が教師を志したきっかけなどによって自身の教師像が確立していった。東京都にも教育に求め

られる教師像が四つある。それは、教育に対する熱意と使命感を持つ教師、豊かな人間性と思いやりのある教師、子供のよさや可能性を引き出し伸ばすことができる教師、組織人としての責任感、協調性を有し、互いに高め合う教師である。自身の教師像を確立すると、面接や他の人に聞かれたときにぶれることのない芯を持つことができる。そういった点で自身の教師像をつくることは大切であると思った。

三つ目の目的を見失わないこととは、最初の気持ちを忘れないことである。これが一番大切であると私は思う。教員採用試験に向けて勉強をしている時は孤独であった。先ほど仲間がいると述べたが、それでも孤独であった。見えない未来と戦って、このままでいいのかという答えも分からない。毎日が不安で仕方がなかった。

また本学は教員志望者が少ないため、身近に私と同じ境遇の人がほとんどいなかった。私と同じ英文学科の子たちは、5月や6月頃にはだいたいの人が内定をもらっていた。みんなが内定をもらっている中、私はまだ試験すら受けていない。東京都は一次試験が7月中旬、二次試験が8月後半、最後の実技試験が9月前半、最終合格発表日は10月中旬とすべてにおいて遅い。プレッシャーに押しつぶされそうで毎日が苦しかった。ここまでできたけど教師の道を諦めようと思ったことも何度もある。それほど毎日がしんどかった。けれども、なぜ私が教員になりたいのかを自身に問うと、ゆるがない答えが出てくる。最初に述べたように生徒の人生に影響を与えたいからだ。人はずっと苦しい境地にいると目的を失いやすい。そうした時こそ一番初めの気持ちを思い出すことが必要であると感じた。この先教員として苦しいことはたくさんあるはずである。そうした時でも、教員を目指した初めの目的を常に思い出したいと思う。

ここまで私は教育実習や教職課程を学んだうえで経験したことを述べてきた。苦しいことの方が多かったが、それ以上の喜びを味わうことができた。最後に、私が苦しかったときの心の支えとなった言葉を述べて締めくくりたいと思う。

“It’s never too late to be who you might have been.”（なりたかった自分になるのに遅すぎるということはない。）

3 教育実習での経験と教職課程での学び

経済学部経済学科 五味弘介

私は、母校である神奈川の県立高校で、3週間の教育実習をさせていただきました。

担当した科目は世界史で、2学年の9クラスすべてを対象に授業をさせていただきました。担当のクラス数が多い分、実施した授業は3種類のみで1種類の授業を9回行う形となりました。それぞれの種類については、初めて生徒に向けて授業をする前に、指導教員に何度も模擬授業を見ていただき、修正を重ねたうえで初回の授業に取り組みました。

私は、ここまで準備を重ねたうえで9回も同じ授業を行えば、完璧な授業ができるようになるだろうと思っていました。しかし実際には、9回の授業の中で満足できた授業は1、2回ほどで、回数を重ねていくほど課題の難易度が上がっていくような感覚を持ちました。

特に一番難しいと感じたのは生徒とのやり取り、発問です。発問をする際は、生徒が発言しやすいように、

発問の仕方やタイミングに気を配りました。しかし、クラス全体の雰囲気や生徒それぞれの個性に応じて、適切な発問の方法やタイミングが異なることに気づき、対応の難しさを感じました。かといって発問をすることに消極的になってしまうと生徒との距離が開いていってしまい、生徒側もただ聴くだけの授業で辛い、こちらも生徒の反応が無くて辛いというように、お互いにとって苦しい授業になってしまいました。

改めて、授業は生徒との双方向のやり取りで作られるものであり、その生徒やクラスの個性が様々であるために、完璧な授業なんて存在しないということに気づきました。また、だからこそ、最低限の準備を万全にしておくことや、めげずにチャレンジし続けることが大切であると感じました。

このように、授業づくりに関しては多くの課題を発見した実習でしたが、実習前までに教職課程において学習したことを活かすことができたという手応えもありました。

教育方法学の授業では、映像を見ることで「いい授業」のイメージが沸き、教科教育法の授業での講義や模擬授業を通して、授業の構想力や授業の基本的な進め方を身につけることができました。実習校の先生方にも、声の大きさや生徒とのやり取りなど、授業における姿勢を褒めていただき自信になりました。

また、授業実習がメインとなる教育実習ですが、実習を充実したものにするためには、周囲とコミュニケーションを積極的にとることが重要だと私は感じました。

まず、教育実習における一番の醍醐味とも言える生徒とのコミュニケーションについて。私は自己紹介の際に、自己紹介文に加えて生徒のコメント欄をつけたプリントを作成し、生徒の部活や好きなもの・ハマっていることなどを自由に記述してもらいました。そのすべてにコメントをつけて返却するのは大変でしたが、それぞれの生徒とコミュニケーションをとる際の話題の切り口を得ることができ、生徒の方から授業後や休み時間に話をしに来てくれることも多くなり、実践してよかったなと思いました。

朝のHRから帰りのHRまでは、思っていたよりも生徒と触れ合う機会が無かったので、放課後に教室を回ったり様々な部活動を見学したりして、授業以外での生徒の様子を見るようにしました。これによって、「この生徒にはこんな一面もあるのか」と、より生徒理解を深めることができました。このような工夫についても、自己紹介プリントの利用を勧めてくださった社会系教育実習の授業や、「生徒指導は生徒理解に始まる」と学んだ生徒指導論の授業が活かされました。

先ほど授業づくりに関して「いい授業」を見るのが参考になったと述べましたが、実習においても、様々な先生方の授業を見学させていただいたことで、たくさんの学びを得ることができました。また、先生方に授業見学のアポイントメントを取る際には、先生方の方から見学するのにオススメの授業を教えてくださいたり、反対に私の授業を見に来てくださったり、アドバイスをくださったりしました。

先生方とコミュニケーションをとることで勉強になったことは、授業に関する点だけにとどまりません。授業以外の点においても、「生徒のため」を一番に考えて行動していることを、先生方との会話の中で強く感じました。それが現れた具体事例として、実習中には体育祭があり、実習生でチームを組んでリレーに参加することになったのですが、先生方にも走っていただけるよう協力を求める際「先生が走ってくださったら生徒も喜ぶですよ」の一言で受け入れてくださる方がたくさんいました。最後には校長先生まで参加してくださったそのリレーは、実際に生徒たちがとても楽しんでくれて、盛り上がるイベントとなりました。

「コミュニケーションをとること」は実習生同士でも大きな役割を持ちました。まず、実習生間で全員の授業スケジュールを共有し、お互いの授業を見学し合うようにしました。先生方に授業を見ていただくことでより高度なアドバイスをいただくことができた一方で、実習生にも授業を見てもらうことで、基本的な部分を見直すことができました。また、わからないことや不安なことを共有したり、資料の準備などの時間の

かかる事務作業を協力し合ったりと、お互いの負担を気軽に軽減し合うことができました。実習後も、教員採用試験に向けて一緒に練習をただけでなく、実習校の文化祭に行くなど定期的に集まるような関係ができ、この仲間は実習で得た大きなものの一つであると思っています。

以上で見てきたように、私は今回の教育実習で、授業における課題をたくさん見つけることができ、生徒や先生方、そして実習生とコミュニケーションをとることで、たくさんの学びを得て楽しい時間を過ごすことができました。正直なところ大変さを感じる時間の方が多くありましたが、それゆえの楽しさもあり、とても充実した3週間だったと感じています。

大学における教職課程では、先述したようにその学びが教育実習に活かすことができただけでなく、実習後においても大きな学びを得ることができました。教職課程には、私と同様に教育実習を経験した仲間が多くいますが、それぞれの仲間の個性や実習校の環境、指導教諭の特徴など、その経験の中身は様々で、仲間たちの実習報告を聞くことでその様々な経験を自分のものとして感じることができました。また、実習後に行われた模擬授業では、それぞれが実習を経て学んだ授業のスキルがふんだんに活かされていて、実習中に先生方の授業を見学した際と同様に、たくさんのいい授業を実際に受けることができ、たくさんの学びを得ることができました。

これは実習後での学びですが、思えば実習前にも、お互いの模擬授業や授業づくりの姿勢、生徒との向き合い方などを共有するといったように、教職課程では仲間同士の学び合いによってとても多くのことを学ぶことができたと感じています。また、その学びだけでなく、このように学び合った仲間を得たこと自体が大きな財産だと思います。それぞれの進路は異なりますが、今後もこのつながりを大切にしていきたいです。

そして、私自身は来春から教職員として教壇に立つため、この教職課程や教育実習、そして仲間たちから学んだことを、実際の教育現場で活かしていきたいと思っています。

4 教職課程で得たもの、教育実習で学んだこと

文芸学部文化史学科 小瀧春佳

私は母校である松戸市の公立中学校へ教育実習に行きました。生徒数は230名11学級(通常学級6クラス、特別支援学級5クラス)と市内で最も小規模な学校です。

私が授業を行った1年生は男子38名、女子36名の2クラスで、ホームルーム・クラスは1年1組でした。1組の生徒たちは非常に活発で、男子も女子も次から次へと話しかけてくれるような、明るく過ごしやすいクラスでしたが、反対に2組はもの静かで、授業にも積極的に参加してくれる生徒が数名いるような状態でした。全校生徒を通じて、とても挨拶が活発で、すれ違うとどの生徒も挨拶をしてくれます。指導教諭の先生について回って様々な教室に訪れましたが、生徒たちはみな真剣に授業を聞き、積極的に授業参加をしていた姿がとても印象に残っています。

1年1組に初めて入り、自己紹介をさせていただいたときは、自作したポップアップ式の自己紹介カードを持参し、教室の後ろの黒板に掲示しました。色とりどりの丸が開くと飛び出す仕組みで、一つひとつの丸に出身校や趣味、好きな教科などを書くと、生徒たちがそれを見て、共通項を探し出し、そこから会話が広

がっていきました。そもそも自己紹介カードは、教職課程の社会系教育実習で森俊二先生が私たち学生に教えてくださった手法で、その時作ったカードではなく、さらにバージョン・アップしたカードを作ったところ、生徒たちにも先生方にもとても好評でしたので、今後教育実習に行かれる方々にもおすすめします。

初週はほとんど授業の見学に費やしました。社会科のみならず、そのほかの教科の授業も見学し、多くの学びを得ました。数学では見学だけでなく、数学に悩まされている生徒たちのアシスタントとなることで、教えることの難しさや、どう教えたらわかりやすいか、そして理解できたときの喜びを知り、この経験がのちの教壇実習に役に立つこととなりました。金曜日には道德の授業をさせていただきました。教材は用意していただきましたが、授業展開を考えるのは難しく、終わった後に、先生方からのアドバイスも含め、多くの反省が残る授業となってしまいました。しかし、生徒たちは真剣に考え、発言してくれて、改めて教えることの楽しさ、そして道德の授業の難しさを知ることになりました。

授業準備には余念なく、多くの時間を費やしました。教科書を中心に、資料集や参考書、その他の文献を多用し、自分が自信をもって授業を行えるように知識を身に付け、そしてより授業を面白くできるような予備知識も得て、授業展開を考えました。

しかし大学の模擬授業で行ったような講義形式で板書中心の授業は、中学校1年生に向けて行うにはあまり望ましくないことを痛感しました。そこで、数回の教壇実習を通し、様々な手法を試してみました。グループ・ディスカッションを中心にしたり、自分の手を動かす作業を取り入れたり、パネルを用意してクイズ形式にするなど、生徒が興味を持ち、なおかつ集中できるような手法を試みたところ、生徒たちは毎回きちんと授業を聞き、自分自身で考えたことを発表してくれるようになりました。また、指導教諭の先生からは面白いとも言ってもらい、精練授業ではその集大成ともいえる授業を、自信を持って行うことができました。

この経験から考えたことは、大学の模擬授業でも講義形式以外の授業を行うことができれば、ということですが。何度か経験したり、ほかの学生が行っているのを直接体験したりすることができていれば、教育実習において、もっとアクティブ・ラーニングの幅が広がるのではないかと思います。

そして、大学で行った模擬授業では板書が中心で、量も多かったのですが、指導教諭の先生からいただいたアドバイスの中に、板書の量を多くしてしまうと理解が遅い生徒たちは板書を写すことに手いっぱいになってしまい、話を聞く暇がなく知識が身に付かない、というものがああり、板書の量を大幅に減らしました。

模擬授業では、板書が書ききれなくなる度に消して新たなものを書いていましたが、そうしてしまうと写しきれない生徒が出てくるということで、板書は一度にすべて書ききれぬ量にしました。時にはあらかじめ用意した模造紙を使って書く量を減らしたり、細かなことはプリントに記入しておいたりするなどの対策をして板書の量を減らすことに徹しました。

このことから気付いたことは、自分が想像していたよりも多くの生徒が板書を写すスピードが遅いということです。大学の講義でそういう生徒たちがいるということは学んではいましたが、思っていた以上の生徒が速いスピードの授業についていけない、という実態に直面しました。

そこで、私は指導教諭の先生からのお言葉もあり、進度は二の次にして、生徒全体の理解を高める授業にしようと思いました。模擬授業では、1単元を1時間で終わらせていましたが、実習では終わらせることは意識せず、生徒の疑問を取り上げたり、時間のかかる作業をさせてみたりすることにしました。そうしたところ、理解がほかの生徒よりも遅い生徒の、積極的に授業に参加しようとする一面を垣間見ることができました。授業中にぼーっとしていたり、興味がなさそうにしたりしている生徒の大半は理解できないことから

そういう態度になってしまうということを学び、できる限りそういった生徒を減らそうと努力することができました。

教育実習中に特に勉強になったことは、ハンデを抱える生徒たちについてです。大学の講義では、障害を持つ生徒のほかに、子どもの貧困や家庭内不和などについて学びましたが、そのような生徒たちが1クラスに数名は必ずいるという現状を知りました。そしてその生徒たちが抱える心の傷や衝動的な行動に直面し、衝撃も受けましたが、何よりこの生徒たちを支えたいと強く考えるようになりました。

家庭内不和から登校日が不安定な生徒には、積極的に話しかけたり、追いついていない授業の内容をカバーするなどの働きかけをしたりしたところ、最終日にはたくさんのことが綴られた手紙を渡してくれました。先生方にも、実習生としてある程度の線引きは必要だけれども、お兄さんお姉さんのような役割も必要だとおっしゃっていただきました。このことは、何かしらのハンデを抱える子どもたちに寄り添い、支えるような仕事ができたいと考えるきっかけにもなりました。

本学の教職課程の授業では、たとえ教員にならなくても、この先生きていくうえで、働くうえで必要なことをたくさん学びました。特に社会科の授業でしたので、社会に関して学ぶことが多く、日本や世界が直面している問題に対して解決策を考えたり、この先私たちがとるべき行動を考案したりしていくうちに、本当に日本に必要なことは何か、世界ではどのようなことが起こっているのかということについて興味を持つようになりました。この興味は、生涯を通じて失ってはならないものであり、興味を持たせてくれた教職課程を履修してよかったと心から思います。

5 転換点

法学部法律学科 小嶋裕人

私は、教育実習での授業を計画するにあたり、「授業内容についての質問を生徒に問いかけることにより生徒の興味関心を引き出し、生徒が思考をはたらかせながら主体的に参加できる授業」を軸に展開を考えた。そして、課題を残しつつもそのような授業に挑戦し、その取り組みについて評価を得ることができた。

私が、そのような授業をしたいと考えるようになったのには、本学の教職課程での学びがあったからだとも考える。本学の教職課程は少人数クラスでの授業が多い。そのため、学生が自ら考えたり、模擬授業等をしたりするなどの時間が多くある。また、社会科教育法についての授業では、社会科教育の歴史や理念・意義、現役の先生方の実践例を学ぶ機会が多くあった。これらの学びは、自分自身がどのような授業をしていきたいかを考える基礎となった。以下、私の大学での学びについてと、教育実習での実践について紹介していきたい。

1 大学での学び

本学の教職課程は1年次から履修することができ、私は1年次から教職課程の授業を履修し、さまざまなことを学ぶことができた。ここでは、教育実習での実践の特に基礎となった社会科教育法の授業での学びを紹介したい。

私は、社会科教育法の授業を履修することによって、私自身のそれまでの「社会科の授業」についてのイメージが大きく変化した。私は、社会科教育法の授業を履修するまで、教科書、資料集の内容を分かりやすく説明していくことが「よい社会科の授業」だと考えていた。そのためには、教科書の内容を詳しく知っていて、わかりやすい板書を書くことが重要であると考えていた。しかし、今ではこのような授業はよい社会科の授業ではないだろうと考えるようになった。以下では、私が挑戦したいと考えるようになった授業の内容について紹介する。

①「学習」から「学び」へ

前述したように、社会科の授業は、教科書の内容を分かりやすく教えることが重要だと考えていた。しかし、教育法の授業の始まりで言われたことは、社会科の授業で重要なことは、覚えるのではなく「既存の知識の更新」であるということだった。「学習」とは覚えることが中心で、生徒自身が学ぶこと自体に興味、関心を持つことができなく、試験や受験を目的に不安を感じながら「学習」するため、学ぶこと自体に興味、関心が持てない状態を指す。

一方で、「学び」は、学習者にとっての意味を重視する学習のことであり、生徒自身の生活や興味、関心に授業内容を引き付けて展開し、他者とともに、生活現実について学び、その現実生活に参加、関与することを重視する。

②「学び」の主体は生徒

「学び」のある授業にするためには、生徒が主体的に参加できる「深い授業」作りをしなくてはならない。「深い授業」とは、「なぜなのか、何が本質なのか」を探究する内容や、生徒が考える常識や生徒が有している既存の知識を覆す内容を取り入れ、「生徒のなぜ」という気持ちを中心に学びをストーリー化することである。そのために、教師は、生徒の「なぜ」と思えるポイントを生徒との関わりから見つけ出したり、疑問に思わせるための教材研究をしたりすることが必要になる。

2 実習での実践

上記のような授業を実践するための準備として、まずは教材研究から始めた。教育実習で担当する科目が地理であり、これまで専門的な学習をしたことがなく、基礎的、基本的な範囲から教材研究が必要であったため、通常よりも重要であった。大学の指導教員のサポートもいただくことで、教材研究については、最低限必要なことができた。また、実習が始まる前から大学の指導教員にアドバイスをもらいながら教育実習での授業の準備を進め、授業案を事前に用意した。

だが、教育実習が始まり、指導教諭の授業を見学し、生徒の取り組みを見たところ、事前準備でやろうと考えていた授業から変更する必要性を感じた。というのは、スライドショーを用いて資料を見せることを計画していたが、資料集や教科書にメモをしている生徒が多く、私もそのメモは後で参照したときに役立つだろうと考えたからであった。そのため、指導教諭の授業と同様に、資料集や教科書に掲載されている資料を積極的に活用し、不足している部分についてのみ準備した資料を配布することとした。

教育実習2週目からは、指導教諭のホームルーム・クラスである2年理系クラスと少人数クラスの2年文系の授業を担当した。それぞれの授業の後に、指導教諭から講評をいただくことができた。

最初の数回の授業については、主に授業内容の正確さや授業内容についての具体例の出し方、そして板書

の量についてのご指導をいただいた。内容の正確さや具体例の出し方については、指導教諭から様々な方法を教えていただき、その後の授業で改善の見込みが立ったと感じた。しかし、板書の量については、書くこと、書かないことの区別が難しく、なかなか改善できないでいた。

板書の量が減らせないでいた私に対して、指導教諭は私の指導案をもとに、実際に板書を書き指導してくれた。これにより、板書すべきこと、そうでないことを考えることができるようになり、板書の量についても大きく改善することができた。また、この板書の量を減らし、板書をする時間を短縮できたことにより、発問をしたり、生徒に考えてもらったりする時間をつくることができた。そのため、この板書の量を改善できたことが、実習期間中の大きなターニング・ポイントであったと思う。

教育実習3週目になると、板書の量の改善により授業時間に余裕ができたことと、生徒とのコミュニケーションも円滑になってきたことから、発問を増やし、生徒に考えてもらう内容を取り入れることができた。

教育実習1週目には、私がやりたいと考える授業である「授業内容についての質問を生徒に問いかけることにより生徒の興味関心を引き出し、生徒が思考をはたらかせながら主体的に参加できる授業」をできるよう、教科書の順序を入れ替えた単元計画を作成し、それぞれの授業で生徒が「なぜ」と考えられる構成を考えていた。しかし、この単元計画がうまく作用した授業もあればそうでない授業もあったため、計画を最大限作用させるためには、教育実習中に授業展開の構成について再検討することが重要だった。

研究授業については、生徒に授業をする前に、指導教諭に授業を見てもらい、改善点を出し、もう一度見てもらおうという工程を数回したことで展開を精選することができた。そして、研究授業では誤字、脱字の失敗はあったが、計画していた展開通りに進めることができ、また、生徒からのリアクション・ペーパーからもやりたいと考えた内容が伝わっていたことが確認できたため、私のやりたいと考えた授業が形になっただろうと思う。指導教諭からのご指導を頂いただき、このような実践をすることができたことは、教育実習において最大の収穫だった。

私は、教職課程を履修し、二つの転換点があったと考えている。一つ目は本学の教職課程であったことで、二つ目は教育実習校で熱心に指導して下さる指導教諭にご指導いただけたことである。

少人数クラスの多い本学の教職課程で教育学について、社会科教育法の最新の考え方について学び、模擬授業などを多くできたことで、私の社会科教育についての見識が深まり、授業力を向上させることができ、また、社会にある様々な問題点についての理解を深めることができた。また、日々の業務でお忙しい中、多くの時間を作っていただき、ご指導いただいた指導教諭のご指導、そして、3週間通して、指導教諭の授業に対する姿勢、生徒に対する姿勢、仕事に対する姿勢を間近で見ることができたことも、教員を目指す私にとってとても勉強になった。

今後も、これまでご指導いただいた方々への感謝を忘れず、本学の教職課程で学んだことをもとに「授業内容についての質問を生徒に問いかけることにより生徒の興味関心を引き出し、生徒が思考をはたらかせながら主体的に参加できる授業」のできる教員になりたい。

おわりに

5人の学生の教育実習を中心とした教職課程における学びの履歴から、本学の教職課程の特徴、あるいは

抱えている課題を見出すことができる。特徴は措くとして、課題について言えば、教室環境の関係もあって、対応することが困難な面もあるし、教科・科目によって現状が異なっている面もあるが、学生が自分のものとする教育方法として、多様なものを提供していくことが求められているということを指摘できる。また、教職課程に登録する学生が支え合い、学び合う関係を紡ぎ、維持することができるような支援体制を構築していくことも求められている。学生の学びの履歴が提起している課題に、どのように応えていくのかを検討していくこととしたい。

また、最初に教職課程に登録する学生が目指すものは多様であると述べたが、それに応じて進路も多様なものとなっている。執筆してもらった5人には教職に就く者が多いが、全員が教職に就くわけではないし、5人以外の学生では、教職に就かない者が多い（もちろん、教職ではないが、教育や人材育成に関連する業種に進む者も多いし、進路先で教育に関連する業務に就く者も多いと思われる）。

全員が教師になるとは限らないとするならば、教職課程に登録した学生にとって共通して重要な教職課程の意味とは何なのであろうか。

教職課程を通じた学びにおいて、学生には、自分の学びに集中することが求められる学習者の視点ではなく、自分の学びに集中する多数多様な学習者に配慮し、支援する教育者の視点を獲得することが期待される。この学生への期待こそ、教職課程の特性の一つであると見ることができる。

しかしながら、その視点は教育者の視点と記しているように、学校教育の教師に固有の視点ではない。教育の営みは人々のかかわりがあるところ（例えば、家庭、職場、地域社会など）に遍在しているのであるから、教師となる人にとってはもちろん、そうでない人にとっても、教育者の視点は必要となる。それゆえ、教職に就くかどうかにかかわらず、教職課程に登録するすべての学生がこの視点を獲得していくことに、教職課程の意味の一つが存する。

この視点に関連する点に付言すると、ハンナ・アーレント「教育の危機」（『過去と未来の間——政治思想への8試論』（引田隆也・齋藤純一訳、みすず書房、1994年、233-264頁）において、彼女は「けっしてあるがままにとどまることなく、誕生、つまり新しい人間の到来によって絶えず自らを更新していく人間社会にとって、教育は最も基本的で不可欠な活動様式の一つ」（249頁）であると述べているが、教育者の視点の獲得と連動しながら、教育という活動様式に対して関心を深める契機を提供することも、教職課程の隠された意味であると言える。そして学びの履歴を綴った学生の文章からは、教師になるかならないかにかかわらず、教育者の視点を獲得し、人間社会にとって基本的で不可欠な教育という活動様式に対する関心を深めた者が存在することを認識できる。

最後に、多忙な時期であるにもかかわらず、自身の学びの履歴を記してくれた三宅氏、加藤氏、五味氏、小瀧氏、小嶋氏に、心より御礼申し上げます。